

宮廷風恋愛者オセロー

横 尾 元 意

Othelloとその材源

*Othello*の主要な材源はGiraldi Cinthio, *Gli Hecatommithi* (1565)¹⁾である。これは、1527年のthe Sack of Romeの後、紳士と貴婦人それぞれ5人が、その惨害を逃れて、マルセイユに船出し、その船中で男性が愛による平和の獲得のしかたについて議論する形式になっている。W.Shakespeareは、これの1584年のフランス語訳を*Othello*に翻案したと考えられている。²⁾両者には、3つの顕著な相違点がある。

第一点は、主人公の結婚後のベニス滞在期間である。材源では、MoorとDisdemonaはある期間、睦まじく、平穩に、この地で過ごしたことになるが、Shakespeareの作品においては、*Othello*はDesdemonaと結婚した夜にベニス公爵に呼び出されて、トルコ艦隊を撃退するため、キプロスへ即刻、遠征するように依頼を受けている。

第二点は、旗手の策略を企む動機が異なることである。材源の旗手(Ensign)は自分の立場にもかかわらず、Disdemonaを愛し、思いを伝えようと苦心したが徒労に終わった。それは、彼女が副官(Corporal)に惚れているためであると思い込み、副官を殺害し、それでも思いが遂げられなければ、MoorもDisdemonaを楽しむことの出来ないようにしてやろうと考えを巡らすのである。他方、*Othello*では、なかんずく主人公が、Iago³⁾へのベニスの有力達の口添えもはねつけて、彼より実戦経験のうすいCassioを副官の地位につけてしまったことへの報復として、Cassioを失

脚させ、その復讐をめぐって、CassioとDesdemonaとの密通を捏造して、Othelloの嫉妬心を煽り、彼に両人の殺害を企てさせることになる。前者は適えられない愛であり、後者はとりわけ阻まれた昇進が、その動機となっている。

第3の相違は女主人公の殺害のされ方の違いである。両方とも旗手の発案ではあるが、材源のDisdemonaを寝室の次の間に控えていた旗手が、ストッキングに砂をつめたもので、3回殴りつけて死なせ、Moorと二人で彼女をベッドに運んで、古い天井の一部を落して彼女の頭を割り、たる木が落ちて不運にも死んだように見せ掛ける。ところが、Othelloの方では、Othello一人でDesdemonaの首を締めて殺したことになる。さて、前者では、旗手にDisdemonaを殴打させながら、Moorは彼女に次のような憎悪と憤怒の言葉をあびせかけている。

‘You wicked woman, you are having the reward of your infidelity. This is how women are treated who, pretending to love their husbands, put horns on their heads.’⁴⁾

しかし、後者のOthelloは殺害を決意しながらも、ベッドに横たわるDesdemonaに妙に冷静な心遣いをしている。

前述の3点は、材源とShakespeareの作品との間にある多くの相違のうちでも著しい個所である。実話と主張するCinthioの材源に、Shakespeareは、なぜ、このような翻案を施したのか。この問題には、いくつかの接近法がありうるが、筆者は、宮廷風恋愛の視点⁵⁾から考察を加えることにしたい。そうすることによって、どうして主人公が最愛の貞潔な妻を殺して、自分も自刃に追い込まれたのかという悲劇の本質に迫ることが出来るものと考えているからである。

宮廷風恋愛は、ローマのAugustus帝時代の恋愛詩にみとめられるが、特に、Ovidiusの⁶⁾*Ars Amatoria*が、その起源とみなされている。その後、宮廷風恋愛が詩に謳われるのが、12世紀南フランスのtroubadoursの恋

愛詩においてである。そして、この愛の様式が12世紀フランスの宮廷付礼拝堂司祭アンドレアスによってまとめられたのが*De arte honeste amandi* (c.1185)⁷⁾である。筆者は本論を、特に、この著書に依拠しながら論じていくことにする。

アンドレアスは、宮廷風恋愛の特徴として、人格によって結びつく男女の秘かな愛であることを強調している。従って、この愛は、恋する男性に相手の女性との肉体的接触を求めさせながらも、彼女への嫉妬によって男性の人格の向上を促し、節度ある愛と行為を保たせる女性上位の愛であり、結婚による夫婦愛とは別個のものであることを説いている。

「恋の神」に出仕するOthello

宮廷風恋愛は秘密の愛なので、恋する男性は、その相手の女性との仲立ちをする人物と腹心の者のほかには、自分の恋を悟られないように⁸⁾する。

*Othello*の冒頭に、IagoがCassioによって副官の地位を横取りされた腹いせに、OthelloのもとへのDesdemonaの出奔を彼女の父Brabantioに、Roderigoを伴って、夜分、教えに行く場面がある。IagoはOthelloとDesdemonaの愛を知っていたのである。また、後の場面で、彼がOthelloに確かめているように、このOthelloとDesdemonaの間を取り持ったのがCassioだった⁹⁾のである。つまり、恋する男性Othelloは、密やかに相手の貴婦人Desdemonaとの仲立ちをCassioにしてもらい、自分の恋を腹心のIagoにだけ洩らしていたという形にとれば、宮廷風恋愛の定式に合致しているのである。また、国柄、年令、肌色、習俗も違う二人が、愛するようになった理由は人格の触れ合いによることが分る。特に、Desdemonaは、Othelloの武人としての人となりの故に愛したとベニス政庁で、次のように公言している。

Desdemona. That I did love the Moor to live with him,

My downright violence and scorn of fortunes
May trumpet to the world. My heart's subdued
Even to the very quality of my lord.
I saw Othello's visage in his mind,
And to his honours and his valiant parts

Did I my soul and fortunes consecrate. (1.3.248-254)

愛を告白されたDesdemonaは、Othelloの人格に引かれて、彼を愛したのである。そして、彼女の一途で熱烈な嘆願もあって、Othelloは、ベニス公の要請に従い、夫婦愛を育む暇もなく、美しき戦士¹⁰⁾を伴って戦場に赴くことになったのである。

ところで、アンドレアスが恋する男性の守るべき31カ条の第2条に「嫉妬心ナキ者ハ恋スル事能ワズ¹¹⁾」をあげている。嫉妬とは愛しき人を失うのではないかという不安な気持ちであり、恋の乳母・恋の防腐剤¹²⁾とも言われるものである。そんな訳で、キプロスにおいてDesdemonaと再会したあとのOthelloの言葉に、それ自体は愛の表現ではあるが、彼女の愛を失うことを前提としたdramatic ironyとみなしうる台詞¹³⁾が散見されるのも理由なきことではないのである。そして、妻を同伴してもCupidのうわついた戯れに惑わされて任務を怠ることはない¹⁴⁾と断言したOthelloも、まもなく、Iagoも含めた他の人たちには、DesdemonaがOthelloの將軍であるように思われたのである¹⁴⁾。

結婚したとは言うものの、Othelloは「恋の神」の戦士であり、心理的には宮廷風恋愛者のままでIagoの挑戦を受けることになるのである¹⁵⁾。

虚構の宮廷風恋愛

宮廷風恋愛者の秘密を知る腹心として、Iagoを考えると、材源にみられるような潜在的な主人公の恋敵では不都合なわけである。それで、Shakespeareは、自作の中ではRoderigoという登場人物を創作して、材

源の旗手 (Ensign) の役割を彼とIagoに分担させるのである。そのようにして、宮廷風恋愛の定式にIagoを組み込みながら、材源にある旗手の腹黒さを彼に発揮させるようにしたのである。

Othelloが自分の業績と人格により勝ち得たDesdemonaの愛を、Iagoは自分の才覚と策略で切り崩せるものと考えている。¹⁶⁾ その手口を、次のように述べている。

Cassio's a proper man : let me see now ;
 To get his place, and to plume up my will
 In double knavery. How? How? Let's see :
 After some time to abuse Othello's ear
 That he is too familiar with his wife ;
 He hath a person and a smooth dispose
 To be suspected—framed to make women false.
 The Moor is of a free and open nature
 That thinks men honest that but seem to be so,
 And will as tenderly be led by th'nose
 As asses are.
 I have't. It is engendered. Hell and night
 Must bring this monstrous birth to the world's light.

(1 . 3 .390-402)

Iagoは、CassioとDesdemonaの両者を、Roderigoに次のように評している。

Iago. Lay thy finger thus, and let thy soul be instructed.
 Mark me with what violence she first loved the Moor but for
 bragging and telling her fantastical lies. And will she love him
 still for prating?—let not thy discreet heart think it. Her eye
 must be fed ; and what delight shall she have to look on the

devil? When the blood is made dull with the act of sport, there should be—again to inflame it and to give sátiety a fresh appetite—loveliness in favour, sympathy in years, manners, and beauties; all which the Moor is defective in. Now, for want of these required conveniencies, her delicate tenderness will find itself abused, begin to heave the gorge, disrelish and abhor the Moor. Very nature will instruct her in it and compel her to some second choice. Now, sir, this granted—as it is a most pregnant and unforced position—who stands so eminent in the degree of this fortune as Cassio does?—a knave very voluble ; no further conscionable than in putting on the mere form of civil and humane seeming, for the better compassing of his salt and most hidden loose affection. Why, none; why, none—a slipper and subtle knave ; a finder-out of occasions; that has an eye can stamp and counterfeit advantages, though true advantage never present itself ; a devilish knavel ! Besides, the knave is handsome, young, and hath all those requisites in him that folly and green minds look after; a pestilent complete knave; and the woman hath found him already. (2.1.219-244)

一方、Cassioは、他の船の到着を待ちながら、Othelloの妻DesdemonaをMontanoに次のように紹介している。

Montano. But, good lieutenant, is your general wived?

Cassio. Most fortunately : he hath achieved a maid

That paragon's description and wild fame ;

One that excels the quirks of blazoning pens,

And in th'essential vesture of creation

Does tire the ingener.

Re-enter second Gentleman

How now ! who has put in ?

2 *Gentleman*. 'Tis one Iago, ancient to the general.

Cassio. He's had most favourable and happy speed :

Tempests themselves, high seas, and howling winds,

The guttered rocks, and congregated sands,

Traitors insteeped to clog the guiltless keel,

As having sense of beauty, do omit

Their mortal natures, letting go safely by

The divine Desdemona. (2.1.60-73)

さらに、戦勝と結婚の祝いの夜、砦でIagoとCassioがDesdemonaを評し合っているとき、後者は彼女をととても美しく、魅力的な目をしており、しかも、貞潔なすばらしい女性と讃美している。このCassioが、Emiliaを仲介してDesdemonaに会って復職について口添えを願う場面で、次のような挨拶をしている。

Cassio. Bounteous madam,

Whatever shall become of Michael Cassio,

He's never anything but your true servant. (3.3.7-9)

恋する男性が敬慕する貴婦人に、彼女の侍女を仲介にして自分の愛を伝え、思いを成就させるというのは¹⁷⁾*Ars Amatoria*以来の常踏である。そして、男性は彼女を自分の主人、自分をその下僕という立場をとるのである。Cassioは、信頼するIagoの助言に従い、自分の讃美するDesdemonaに侍女Emiliaの手引きによって、貴婦人の夫Othelloの不在のとき、密かに彼女に会って自分の復職について嘆願している。Emiliaの状況説明やDesdemonaの意気込みからして、容易に彼の復職は適うように思われた。ところで、Cassioの場合、彼は自分の愛の成就を求めたのではなく、復職への助言を願ったのである。しかも、Cassioの人格にDesdemonaが

特別な敬愛の念を抱いていたわけでもなく、さらに、Cassio自身Biancaとの交際があり、宮廷風恋愛者とは言いがたいのである。しかし、これをIagoは、『トリスタンとイゾー物語』の悪党のごとく、不義密通の愛に仕立てていくのである。さて、『トリスタンとイゾー物語』の中に、彼らが森の中にいるという情報を得て、イゾーの夫マルク王がその場所に行ってみると、二人はあいだに抜身の剣を置いて寝ていた¹⁸⁾ので、王は自分の疑いを恥じて、兩人をそのままにして去って行く場面がある。ところが、OthelloはIagoに同じようなことを言われると、嫉妬をかきたてられて、マルク王とは違って、次のように反論している。

Iago. Or to be naked with her friend in bed

An hour or more, not meaning any harm ?

Othello. Naked in bed, Iago, and not mean harm!

It is hypocrisy against the devil:

They that mean virtuously and yet do so,

The devil their virtue tempts and they tempt heaven. (4.1.3-8)

マルク王には外観と内実には美しき一致があると信じられるのに、Othelloは、もはや、それを是認出来る程、単純な人間観の持ち主ではなく¹⁹⁾なっているのである。

宮廷風恋愛への挑戦

キプロスの守備を任せ、美しき妻を伴って赴任した宮廷風恋愛者Othelloを、Iagoは 誠実で情深く高潔な人柄と見抜き、彼に誠実そうに²⁰⁾神々しい姿をかりてDesdemonaへの疑念を吹き込もうとする。しかし、OthelloはIagoの言葉を、直ちに、信じるほど愚かではない。彼は次のように言っている。

I'll see before I doubt; when I doubt, prove;

And on the proof, there is no more but this,

Away at once with love or jealousy ! (3.3.192-194)

Othelloは、Iagoの誘導するままに妻の不貞の真偽を確かめようとすればするほど、彼の計略にはまって、ソポクレスの『オイディプス王』の主人公のように自ら破滅へと突進していくことになるのである。

Iagoは、まず、ベニス女性の気質を説明して、父親を欺きながら²¹⁾Othelloへの愛を募らせていたDesdemonaを指摘し、さらに、Othelloにとって致命的なことに言及する。

Iago. Ay, there's the point: as—to be bold with you—
Not to affect many proposed matches
Of her own clime, complexion, and degree,
Whereto we see in all things nature tends—
Foh! one may smell, in such, a will most rank,
Foul disproportion, thoughts unnatural.
But pardon me : I do not in position
Distinctly speak of her; though I may fear
Her will, recoiling to her better judgement,
May fall to match you with her country forms,
And happily repent. (3.3.230-240)

Desdemonaは、Othelloの見掛けによらず、²²⁾彼の人格と実績を敬愛するが故に、このような違いを越えて結婚したのである。つまり、Iagoは、貴婦人が恋する男性の人格を評価する故に成立する宮廷風恋愛の核心的要件の挑んでいるのである。²³⁾

これに対して、Othelloは反論するどころか、内心 Iagoの指摘を受け入れ、自分勝手な理屈をつけて、²⁴⁾納得している。そして、自分の疑念を妻に率直に質してみようという姿勢がなく、さらに、自らの想像によって嫉妬にかきたてられていくのである。²⁵⁾

そこで、Iagoは架空のCassioとのDesdemonaの不義密通に、傍証を積

み重ねていくのである。Cassioと同泊したときの寝言と所作の作り話、DesdemonaのハンカチでCassioが髯を拭くのを目撃した話に、Othelloは、激昂して、IagoにCassio殺害まで指示するのである。それなのに、彼は、Desdemonaには平静を装って、ハンカチの所在をたずね、Iagoの話しの真偽を確かめようとする。さらに、IagoにCassioとDesdemonaが互いに慰めあったという作り話²⁷⁾をされると、Othelloは情念に掻き乱され、癩癰の発作を起してしまう。その後、密会の証拠として、Othelloは、Cassioが彼の良からぬ女友達Biancaを愚弄するのを見せられると、その相手がDesdemonaであり、Cassioと不義を働いたに違いないと思い込んでしまうのである。続いて、彼は例のハンカチをBiancaがCassioに突き返すのを目撃する。ここで確かな証拠を得たように思われたのに、意外にも、OthelloはDesdemonaへの憎悪と思慕との間で逡巡するのである。さらに、ベニスからの使者Lodovicoの前でDesdemonaを殴打したかと思うと、Emiliaに妻とCassioの間柄を尋ねる。しかし、もはや、OthelloはEmiliaの忠言を、その通りに受けとることが出来なくなっている。彼女をCassioとDesdemonaとの取り持ち役²⁹⁾と思い込んでいるのである。そして、Desdemonaが、自分は誠実な妻で不貞を働いた覚えはないと反論し、その相手の名を聞いて、夫が自分に疑念を抱く背景を知ろうとしても、Othelloは、CassioとDesdemonaが密通しているのは疑いの余地のないことで、妻はうそぶいているものと思い、自分の身の上を涙をながして慨嘆するのである。どうして、Othelloは妻と距離を置くのであろうか。

Desdemonaの父Brabantioに、Othelloは魔術を使って娘を誑かしたと言わしめるほど、密やかにCassioを仲立ちにして彼はDesdemonaの愛を勝ち得て結婚をした。しかし、夫婦の愛を育む暇もなく、妻には宮廷風恋愛者としてキプロスに遠征するのである。それが、Brabantioの予言³⁰⁾のごとく、OthelloとDesdemonaの間で仲立ち役をしたCassioが、裏切³¹⁾って、宮廷風恋愛者となって、Emiliaを仲立ちに両者に割り込んで来た

形なのである。そして、Cassioの腹心であるとともに、Othelloの愛の成り立ちを知っていたIagoが、宮廷風恋愛者Othelloの腹心という立場で、彼の心の中に架空のもう一つの宮廷風恋愛を構築しながら、Cassioの裏切りへの復讐心とDesdemonaへの嫉妬をかきたてたのである。従って、Othelloは宮廷風恋愛者としての嫉妬とDesdemonaの夫としての嫉妬の相反する2つの嫉妬の葛藤の中に落ち入っているのである。

宮廷風恋愛者を貫く Othello

*De arte honeste amandi*によると、宮廷風恋愛者の嫉妬は、彼が恋する貴婦人の愛を失うのではないかという不安な気持ちであり、夫婦における嫉妬は猜疑心³²⁾である。Othelloも妻の心を独占できないことへの猜疑と苛立ちを激しい口調で述べている³³⁾。両者には類似点があるものの、前者は相手の女性を理想化し、彼女を恋するのに相応しい男性になろうとして、恋する男性の人格を向上させる点で後者と異なっている。

Roderigoの叫び声を耳にすると、Iagoが計画通りCassioを殺害してくれたと思って、OthelloはDesdemonaへの憎悪をかきたてながら、次のように言っている。

*Othello. 'Tis he. O brave Iago, honest and just,
That hast such noble sense of thy friend's wrong !
Thou teachest me : minion, your dear lies dead,
And your unblest fate hies. Strumpet, I come !
Forth of my heart, those charms, thine eyes, are blotted ;
Thy bed lust-stained shall with lust's blood be spotted.*

(5.1.30-36)

ところが、明りを手にしてDesdemonaの眠っている寝台に近づくOthelloの口調は、次のように変化している。

Enter OTHELLO with a light ; he locks the door

Othello. It is the cause, it is the cause, my soul.
Let me not name it to you, you chaste stars !
It is the cause. Yet I'll not shed her blood,
Nor scar that whiter skin of hers than snow
And smooth as monumental alabaster —
Yet she must die, else she'll betray more men.
Put out the light, and then put out the light:
If I quench thee, thou flaming minister,
I can again thy former light restore
Should I repent me; but once put out thy light,
Thou cunning'st pattern of excelling nature,
I know not where is that Promethean heat
That can thy light relume. [*sets down the taper*
When I have plucked the rose,
I cannot give it vital growth again,
It needs must wither: I'll smell it on the tree.

[*kisses her*

O balmy breath, that dost almost persuade
Justice to break her sword ! One more, one more.
Be thus when thou art dead, and I will kill thee,
And love thee after. One more, and that's the last.
So sweet was ne'er so fatal. I must weep,
But they are cruel tears; this sorrow's heavenly:
It strikes where it doth love. She wakes. (5.2.1-22)

正義のためDesdemonaを殺すのは、止むを得ないと思いながらも、美しく取り扱おうとし、造化の傑作であるDesdemonaの命の火を消すことに口惜しさを感じている。少くとも、彼女の靈魂は救おうと配慮をしてい

る。材源において、MoorがDisdemonaを憎悪と復讐心から旗手(Ensign)に惨たらしく殺害させる記述とは大きく異っている。しかし、彼女がCassioとの不義を認めず、ハンカチの贈与を否定したのに、Othelloは真剣に取り上げようとせず、追放を希望しても取り合わず、Desdemonaをstrumpet! と罵って殺してしまうのである。しかも、彼女に苦しませまいと、再度、首を締めている。そして、その後、LodovicoにOthelloは、この殺害について次のように言っている。

Lodovico. O thou Othello, that wert once so good,
Fallen in the practice of a damned slave
What shall be said to thee ?

Othello. Why, anything:
An honourable murderer, if you will;
For nought did I in hate, but all in honour. (5.2.293-297)

Othelloの冷徹な態度を、どう理解したらよいのだろうか。

アンドレアスは、宮廷風恋愛において不実を働いた女性の取り扱いについて、こう述べている。

二人の男と淫らに戯れて恥じないような女が罰せられずにすんでいいものか。男の場合、そのような事は日常茶飯であり、男には此の世の本性淫らな事一切が女より簡単に許される特権があるので、まあ大目に見てもいい。が、女の場合、慎み深く上品なその本性³⁴⁾からして、そのような事は恥多きことと思われ、何人かの男の情欲をほしいままにした女は、万人から女の風上にも置けぬ者、他の婦人たちと付き合うことも出来ぬ不潔な女と見做される仕儀となる。従って、別の男の抱擁を味わった後、女が元の恋人のところに帰るなら、それは彼にとって恥辱である。女には彼を慕う恋心などもはやないことは明らかなのだから。ならば、女に情けを掛ける必要が何処³⁵⁾にあらう。

恋する男性Othelloにとって恥辱であり、さらに男性を裏切らせないため³⁶⁾に彼は、自分の妻Desdemonaを殺すことによって、公の場から彼女を追放したのである。

Othelloは宮廷風恋愛の枠組みの中で、Desdemonaを妻とし、彼女を愛したのである。従って、常に、Desdemonaとの間に心理的距離が置かれ、Cassioとの疑念の生じた後は、専ら、Iagoからの情報だけを信じたのである。もしも、主人公が、宮廷風恋愛の拘束を受けずに、鍵を握るハンカチについてもEmilia³⁷⁾やCassio³⁸⁾に問いただしていたら、その入手経路くらいは分ったかもしれないのである。また、妻から不貞を働かれるのが運命であるかのように考えずに、Desdemonaの恩義に感謝して、夫婦の信頼関係を育てていくべきだったのである。夫婦でありながら宮廷風恋愛者のごとく、妻を愛したところにOthelloの愚かさの根本がある。一方、Iagoは宮廷風恋愛の美しき仮面を剥ぎ取り、しかも、宮廷風恋愛を働かれる夫の側から、醜悪な宮廷風恋愛描いて見せたのである。従って、Iagoは宮廷風恋愛に二重の意味で挑みかかったということが出来る。

さて、本稿の冒頭でOthelloとその材源との著しい相違点を挙げて、それぞれ、OthelloがDesdemonaと結婚した夜に、キプロスへの赴任を要請されるのは、彼の心の中に宮廷風恋愛者としての嫉妬と夫としての妻への嫉妬の双方を引き起こし、彼をその相克に落とし入れるためであり、旗手の悪巧みの動機に変更を加えているのは、IagoにOthelloの腹心としての役割を担わせて、彼を宮廷風恋愛の枠組みに取り入れるためであり、Othelloに無惨なDesdemonaの殺害をさせなかったのは、彼が宮廷風恋愛者として貫き通し、彼女を殺してしまったことを示すためであることを論じてきた。結局、OthelloがDesdemonaを殺害したのは、材源のように、愚かにも旗手を盲信したためではなく、Desdemonaを愚かな愛し方³⁹⁾をしたためであったと表現するために、W.Shakespeareが、宮廷風恋愛

を利用したものと筆者は考えているのである。

Othelloとその時代

*Othello*を宮廷風恋愛の視点から考察し、この作品は宮廷風恋愛の伝統に則して翻案されたと解釈しうるのではないかということを論じてきた。

さて、W.Shakespeareが*Othello* (1604)を創作した時期は、芸術論的には1520年頃Renaissance期を終え、MannerismあるいはBaroque時代に入っていたのである。この特徴に古典様式への反撥が挙げられる。筆者は、この芸術思潮の中から*Othello*は生まれたものと考えている。それ故に、宮廷風恋愛を妻に働かれるOthello、純愛のOthelloとDesdemonaに対するIago、Desdemonaへ嘆願しながらBiancaと交流のあるCassioなど、多角的視野から創作されたものと筆者は想定している。さらに、*Othello*は宮廷風恋愛の世俗化の例証であるとも考えている。W.Shakespeareの四大悲劇の中でも、家庭悲劇という範疇に分類されて過小評価されてきた嫌いがあるが、宮廷風恋愛という西洋文学の一大伝統を踏えた戯曲であるという点で、等閑視することの出来ない作品であると思われるのである。

—注—

※本稿はテキストとして *Othello*, ed., A. Walker and John D. Wilson (Cambridge U. P., 1969) を用いた。

- 1) *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare* vol. VII, ed., Geoffrey Bullough (Columbia U. P. 1973), pp. 239-252.
- 2) *Ibid.*, p. 194.
- 3) *Othello* 2.1.285-306
S. T. Coleridge は Iago の動機を 'motiveless malignity' と評した。
- 4) Geoffrey Bullough, *op. cit.*, p. 251.
- 5) *Othello* に chivalric elements を指摘する学者もいる。Antoinette B. Dauber, 'Allegory and Irony in *Othello*' *Shakespeare Survey* 40 (1988), p. 123.
- 6) Publius Ovidius Naso (43 B. C. - A. D. 17?)
- 7) アンドレアス・カペラヌス, 『宮廷風恋愛の技術』野島秀勝訳 (法政大学出版局, 1990)
- 8) *Ibid.*, p. 101, p. 108, p. 214, p. 226.
- 9) *Othello* 3.3.100.
- 10) *Othello* 2.1.179.
- 11) アンドレアス・カペラヌス, *op. cit.*, p. 236.
- 12) アンドレアス・カペラヌス, *op. cit.*, p. 128.
- 13) *Othello* 2.1.186-196, 3.3.91-93.
- 14) *Othello* 1.3.268-274, 2.1.74, 2.3.307-308.
- 15) 宮廷風恋愛者は、結婚を目的として貴婦人に恋するわけではなく、結婚した時点でその男性を宮廷風恋愛者とは言い難い。
- 16) *Othello* 1.3.353-356.
- 17) *The Courtly Love Tradition*, ed., Bernard O'Donoghue (Manchester U. P., 1982), pp. 30-31.
- 18) 『トリスタン・イゾー物語』ベディエ編、佐藤輝夫訳 (岩波文庫、1953), pp. 108-109.
- 19) *Othello* 3.3.129-131.
- 20) *Othello* 2.3.329-355.
- 21) Michael Neill, 'Changing Places in *Othello*', *Shakespeare Survey* 37 (1984), p. 122.
- 22) *Othello* 1.3.252.
- 23) アンドレアス・カペラヌス, *op. cit.*, p. 70.
- 24) *Othello* 3.3.262-279.
- 25) *Othello* 3.3.340
- 26) アンドレアス・カペラヌス, *op. cit.*, p. 227.

- 27) *Othello* 4.1.1-34.
- 28) *Othello* 4.1.177-202.
- 29) *Othello* 4.2.20-23.
- 30) *Othello* 1.3.292-293.
- 31) アンドレアス・カペラヌス, *op.cit.*, p.225.
Othello 3.3.420-422.
- 32) アンドレアス・カペラヌス, *op.cit.*, pp.128-129.
- 33) *Othello* 3.3.270-275.
- 34) *Othello* 5.2.82.
- 35) アンドレアス・カペラヌス, *op.cit.*, p.210.
- 36) *Othello* 5.2.6.
- 37) 材源では、旗手の妻は夫の悪企み全体を知っていたのに、彼を恐れる故に最後まで秘密にしている。
Othello 3.4.24
- 38) *Othello* 3.3.277-279, 3.4.66-71, 4.2. 48-57.
- 39) *Othello* 5.2.346.
材源では、Moorの没落の原因を‘Who had believed too foolishly’と評している。
また、Disdemona(ギリシャ語で‘unfortunate’の義)の不幸は、その名をつけた父親にも責任ありとしている。